



## 四旬節第1主日 (ルカ 4:1-13)

試練の中で「貧しい人の友イエス」を示してくださった

2月23日、日本の教会はペトロ中村倫明長崎大司教の着座式ミサを祝いました。嚴重な感染対策のため参列者は300人ほどでしたが、多くの人の目が中村大司教様に注がれている、そう感じさせる熱量がありました。あれはきっと聖霊の働きだったのでしょうか。そして、その期待に十分応える決意表明をミサの中で示していただきました。

いくつか、大司教様の決意表明と受け取れる部分を紹介します。一つは、大司教となられて新調された牧者の杖「バクルス」です。材質は「オリーブの木」でした。パレスチナ地方の実際の羊飼いが持っている杖をイメージしたと聞きました。聖書には「鉄の杖」という表現がありますが、それは力で押さえつける印象です。中村大司教様は、優しく教え導く姿を印象づけるために、材質を木にこだわったのでしょうか。

あと一つ、大司教様の決意表明を感じさせたのは、ミサの「奉献文」です。ミサの式次第の中で「本体部分」と言える祈りです。通常、第一から第四の奉献文まで使用されています。皆さんの祈り書には、その中でも特に使用頻度の高い「第二奉献文」「第三奉献文」が掲載されています。

ですが中村大司教様は、それら通常の奉献文ではなく、「種々の機会のミサの奉献文・四（貧しい人の友、イエス）」これを用いられたのです。手元にある儀式書によれば、2014年に増補版が発行されたときに「入手困難になっている奉献文であるため」掲載されたとあります。少なくとも8年前には目に触れることができたわけですが、この8年間、私は一度も唱えたことがありませんでした。

けれども着座式ミサで実際に唱えてみて、中村大司教様が、今の教皇フランシスコと同じく「貧しい人々の友となる」その決意を表明されたのだと確信しました。教会が、小さな者を心にかけることを忘れたら教会でなくなりますよと、この奉献文を司教司祭全員で唱えて、確認する機会としてくださったわけですね。

最後になりましたが、今週は四旬節第一主日です。イエスが荒れ野で四十日間悪魔の誘惑を受け、それをすべてしりぞけていきます。この記事が福音書に収められているのはイエスご自身のためではありません。誘惑に何度も負け、打ちのめされる弱い人間のために、イエスが先頭に立って模範を示すことを教えるのが目的です。

人が飢えに苦しんで弱り果て、権力や富に目が眩んで自分を見失い、神を信じられなくなったとしても、それでもイエスは人間を見捨てることなく、常にともにいて父のいつくしみと母の優しさを注いでくださいます。イエスが貧しい人々の友となってくださったように、中村大司教様も友となってくださり、一緒に歩いてくださる。その決意表明が込められている。そう感じました。

今私たち人類は、四十日の荒れ野での試練の中にいるような状態です。それでも神は新たなリーダーを与えてくださり、希望を示していただきました。復活のその時を信じて、私たちも中村大司教様とともに、神を信じ、神を証ししていくことにしましょう。